

# 流氷によって北海道枝幸町に 集団座礁したシャチの記録

宇仁義和<sup>1</sup>・狩野和子<sup>2</sup>・村山良子<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 東京農業大学オホーツクキャンパス, <sup>2</sup> 枝幸町文化財保護委員会

## Ice-entrapments of Killer Whales in the Southern Okhotsk Sea, off Esashi, Hokkaido, Japan

### はじめに

枝幸町では、流氷によるシャチの集団座礁がしばしば生じていたようである(枝幸町史編纂委員会 1971:109-110)。本論では、町史には掲載されていないが、骨格や写真、新聞記事などの証拠が得られた3事例について報告するものである。

### 日付と場所、頭数

報告するシャチの集団座礁の日時と場所は、1) 1925年(あるいは1924年)3月21日に枝幸町目梨泊ソセツ浜, 2) 1958年3月19日に枝幸町岡島熊石, 3) 1977年2月5日に枝幸町下幌別(港南ウエンナイ海岸)である。頭数は、1925年13頭, 1958年10頭(報道では20頭), 1977年8頭で、1925年は幼獣, 1977年は胎児が含まれていた(図1, 表1)。検証可能な資料としては、いずれも頭骨や全身骨格、新聞記事があり、これについては後述する。

### 事例の詳細

#### 1. 1925年3月21日 目梨泊

この事例については、頭骨2個体分が小樽市桂岡の個人宅に保管されていた。文字記録として

は著者の1人、狩野が1994年に自身で発行していたミニコミ誌「桂岡自然新聞」で紹介した間

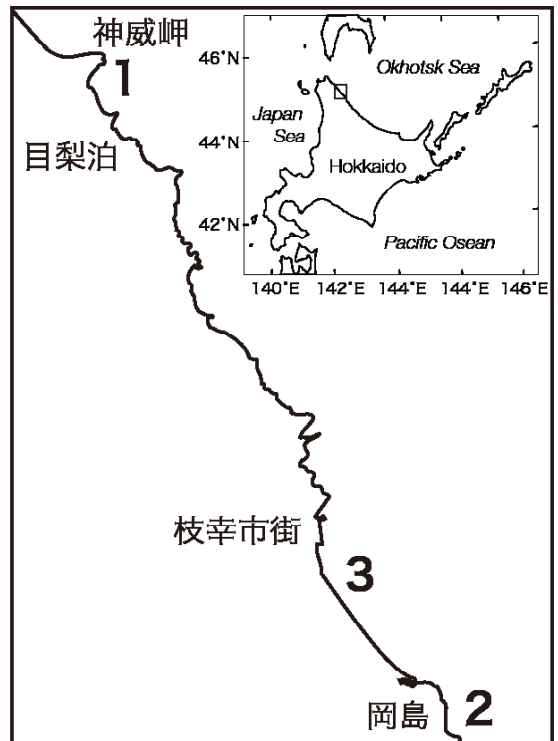


図1. 枝幸沿岸における流氷によるシャチの集団座礁の発生場所

<sup>1</sup> 〒099-2493 北海道網走市八坂196 unisan@m5.dion.ne.jp

<sup>2</sup> 〒047-0264 小樽市桂岡町27-5

<sup>3</sup> 〒098-5823 枝幸町文化財保護委員会 枝幸郡枝幸町三笠町1614-1

表 1. 枝幸沿岸における流氷によるシャチの集団座礁の記録

No.	日付	場所	群れ	文献	標本	登録番号*
1	1925年3月21日 1924年の可能性	枝幸町目梨泊 ソセツの浜	13頭(幼獣を含む)	桂岡自然新聞 1994年5月	頭骨2(国立科学博物館)	O-314
2	1958年3月19日	枝幸町岡島熊石	10頭(日刊宗谷では20頭)	日刊宗谷 1958年3月21・23日	頭骨1(オホーツクミュージアムえさし)	O-4871
3	1977年2月5日	枝幸町下幌別 (ウエンナイ)	8頭(雄2頭、雌6頭、別に 胎児1頭)	朝日新聞 1977年2月6日 北海道新聞 1977年2月6日ほか	全身骨格(小樽水族館) メス	O-423

\*下関鯨類研究室「ストランディングデータベース」登録番号

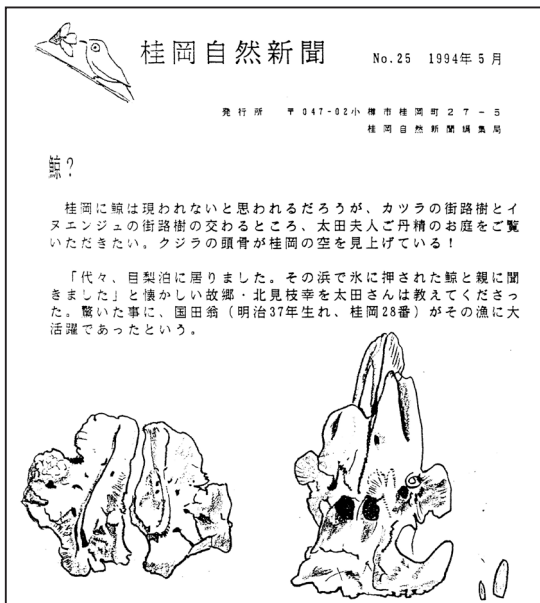


図 2. 1925年の事例を紹介した「桂岡自然新聞」No.25 1994年5月発行

き取りがある(図2, 狩野 1994)。この記事は、2005年2月7日に羅臼町相泊で発生した流氷によるシャチの集団座礁を受け、2005年6月26日に行われた日本海セトロジー研究会第16回大会でも紹介され、参考資料として配布された。座礁シャチを捕獲した体験談は次のとおりである。[ ]内は今回の再録での注記である。住所は省略した。また、ごく一部で語句を訂正している。

「鯨？」桂岡自然新聞 No.25 1994年5月

桂岡に鯨は現れないと思われるだろうが、カツラ

の街路樹とイヌエンジュの街路樹の交わるところ、太田夫人[サダ氏]ご丹精のお庭をご覧いただきたい。クジラの頭骨が桂岡の空を見上げている!

「代々、目梨泊に居りました。その浜で氷に押された鯨と親に聞きました」と懐かしい故郷・北見枝幸を太田さんは教えてくださった。驚いた事に、桂岡の国田翁[祐吉氏](明治37[1904]年生れ)がその漁に大活躍であったという。国田氏は「21才くらいの時の3月の彼岸の中日、21日であった。その年あとで、青森までイカ漁に出かけたのだが、鹿の角にイカがたくさん付くとして、それではあの鯨のキバでも良いかと考え、目梨泊から2本送ってもらって、青森には専門の職人がいたものであって、そこに頼んで針を作らせたところ、はたして大変よい漁をしたのであった。イカ釣るトンボといい、3寸くらいの長さである。

氷が来る、潮が来るで磯に近づきすぎ、気が付いた時には潮がれして氷にはさまれて陸にあがってしまった。あゆみを渡し渡しして近づき、浜頓(別)の火事で焼けて鞘[さや]も鏝[つば]も無くなった日本刀を持っていた人がおって、なげる刀だというのでそれを使ったところ、これがよく切れる、それで仕留めた。真っ赤な血が海を染めた。

カミギリの群れであった。雌が7ヒロ雄が13ヒロ、13頭おったが2頭は逃げた。沖では5尺で1間、1ヒロだ。これは鯨の王様と呼ぶ。なにしろ歯がある。鯨は33ヒロから40ピロだが、

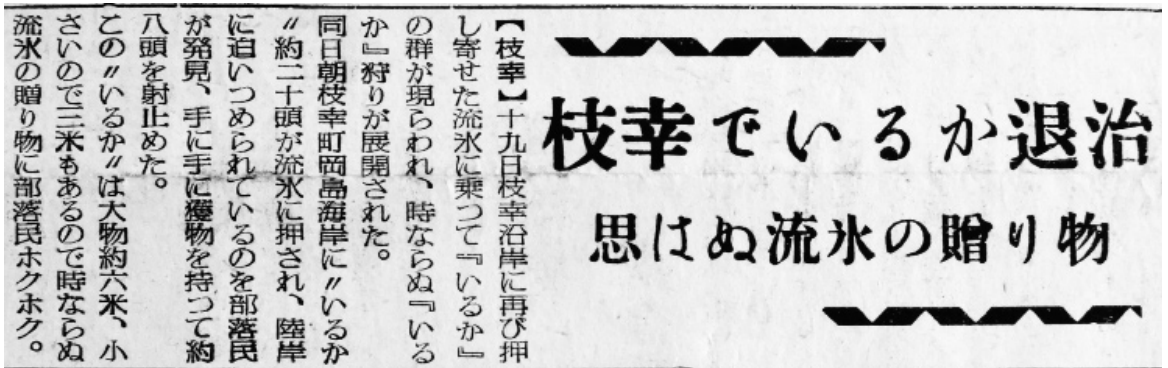


図 3. 1958 年の事例の初報は「いるか」だった「日刊宗谷」昭和 33 (1958) 年 3 月 21 日宗谷郡部版 (稚内市立図書館蔵)

その大きい鯨の横にぴったり付いてかじり付きそのまま深く深く潜ると鯨もたまらず苦しくなる、そうやって大きな鯨の肉を歯で噛み切るので、カミギリは鯨の王様と呼ぶ。

いさばやさんに、1頭12円から14円で売り、1頭は部落の人で食べた。カミギリの腹にはアザラシも丸呑みで入っているくらいだから、この時もさばいた腹から鯨のショウ【正?】肉をごっそり見つけて、塩漬けにして長い事ご馳走とした人もあった。仕留めた所は、アイヌ語でソセツと呼ぶ浜であったから、なにしろ険しい斜内山道を越えなければならない、いさばやさんはたくさんの人を雇い、背中にしよって運ばせた。

2年かそこら後であった。新造船を目梨泊に廻した時、カミギリがやって来て、船の底を何度も何度も潜る、尾であおぐ。そのはね返る水の量といったらたいしたものだ。なによりあの馬力では、尾で舟はかえされる。一同あの時のたたりかと恐れおののき、ジョーノメを打つサエヅチで舟縁をたたきながら、ただただ南無妙法蓮華経と唱えるうちに、舟は磯に近づき、カミギリも利口で腹が擦るようになったので沖へ去って行き、助かった。

水に押されたカミギリの群れを仕留めた事は、後にも先にも無いことであった。このままでは、部落の者がよそで語っても証拠がないだろうと思って、ある時わしはムシロを持って行って、頭の骨をしよって来た。丸い方が雌で、尖っているほうが雄だ」と、青年のまなざしで語ってくださる国田翁90歳である。

☆カミギリとは、クジラ目ハクジラ亜科マイルカ科シャチである。いさばやさんは、ここでは魚屋さんのこと。ジョーノメは、船底の水を抜く為の穴にはめておく栓。サエヅチは木椎【と書き】、小形の木の槌。「鹿の角で作ったイカ釣るトンボに何故イカがたくさん付いたか」というと、切ってみればわかるけれども鹿の角には小さい穴がたくさんあいていて、針を海へ沈めてやるとその穴から小さな気泡が次々にプクプクキラキラ輝きながら海面に上がっていく、イカはその輝きに引かれて針に引っ掛かる、餌も付けない」ということも国田翁は教えてくださった。

頭骨の所有者は太田サダ氏は国田佑吉氏の姪にあたり、小樽に引越す際、目梨泊の自宅にあった頭骨や歯をわざわざ持ってきたという。なお、この頭骨2体分は2005年6月に国立科学博物館に寄贈されている。年月日に関する国田氏の記憶については、日付についてはおそらく間違いなく、発生年については1924年の可能性もあるとした。その理由は、戦前の彼岸の中日は現在のように春分の日と連動しておらず、春季霊祭として3月21日に固定された祝日であったこと、21才という発生年が正しいとしても数え年と満年齢の確認をしていないため、1925年ではなく1924年の可能性が残されているためである。あるいは21才の記憶が数年違っていれば、数年違いの発生年かも知れない。

これ以外の文字記録については、郷土史や新



図 4. 1958 年の事例の記事「日刊宗谷」昭和 33（1958）年 3 月 23 日宗谷郡部版（稚内市立図書館蔵）

聞記事は見つかっていない。日付が近い新聞には、1924 年 3 月 24 日(月)北海タイムスに「宗谷線は吹雪で列車立ち往生…昨 22 日の大吹雪の為、列車は猿払、浅茅野間に於て立往生をなし」という記事、1925 年 3 月 21 日(土)北海タイムス紙では「宗谷海峡の流水で稚内結氷、本月中は解けまい。[稚内 20 日発電] 宗谷海峡の流水は昨日夕刻より風が北西に変わった為稚内に押し寄せ之が気温の低下と共に今朝久しぶりで結氷した厚さは凡そ 1 尺位で漸次暖かくなってくるが今月中は融けさうないと」と報じられており、両年ともに春の彼岸の中日頃に悪天候で流水の動きが烈しかったことがわかる。

シャチの呼称に関して、聞き取りの際、国田氏は一度もシャチと言わなかった。北海道方言辞典(石垣福雄 1991 年北海道新聞)には、カミギリはシャチ(亀田郡戸井町採録)と記載されているほか、1994 年 5 月電話で枝幸町役場に問い合わせた際にも「ああ、それはシャチのことですよ、今でも使います」との回答であったので、最近まで北海道の広い範囲で使用されていた名称のようである。

なお、ソセツの浜の位置については、「枝幸町史上巻」(枝幸町史編纂委員会編 1967: 604-606)の記述のとおり、明治初期に枝幸村と頓別村の境とされたソセチ川がショーシュツオマナイという小川であり、この川は神威岬南側の小湾に流れ込んでいることが北海道仮製 5 万分の 1 地形図「オホトマリ」(陸地測量部 1898 製版)で確認できる。

## 2. 1958 年 3 月 19 日 岡島

「日刊宗谷」の初報では「枝幸でいるか退治」と伝えていた(図 3)。岸に追いつめられた 20 頭のうち 8 頭を捕獲「思はぬ流水の贈り物」とし、ここでも食料として評価している。この事例の資料としては、頭骨 1 体分がオホーツクミュージアムえさしに保存されている。その後、「日刊宗谷」1958(昭和 33)年 3 月 23 日宗谷郡部版(稚内市立図書館蔵)に「流水も悪くない「シャチ」退治の攻防戦」という訂正記事が写真付きで掲載された(図 4)。

また、著者の 1 人、村山が 2005 年 7 月に枝幸町岡島在住の佐賀繁郎氏に聞き取りを行ない、FAX で回答を得ている。これによると、

1. 昭和 30 年頃、現在の岡島港の南方 200m 位のところにある通称「熊石」の岩場の岸に、シャチ 10 頭が流水に閉じ込められた。そのうち 7 頭を馬を使って陸に引揚げ解体し、食用にした。
2. 解体したうち 1 頭の頭骨を岡島在住の佐賀幸夫氏が保管していたが、シャチの頭を信仰する人に譲った。ただし発生時、佐賀繁郎氏は岡島には不在だった。などということである。

## 3. 1977 年 2 月 5 日 下幌別

1977 年の事例は朝日新聞が全国版社会面で流したほか(朝日新聞 1977 年 2 月 6 日, 図 5)、北海道新聞が何度か報道している。これらの報道を見る限り、調査研究の関わりは小樽水族館が全

「珍味もたんこのう」が中心で「珍味もたんこのう」が見出しになった

「珍味もたんこのう」が中心で「珍味もたんこのう」が見出しになった

「珍味もたんこのう」が中心で「珍味もたんこのう」が見出しになった

「珍味もたんこのう」が中心で「珍味もたんこのう」が見出しになった

「珍味もたんこのう」が中心で「珍味もたんこのう」が見出しになった

「珍味もたんこのう」が中心で「珍味もたんこのう」が見出しになった



「珍味もたんこのう」が中心で「珍味もたんこのう」が見出しになった

「珍味もたんこのう」が中心で「珍味もたんこのう」が見出しになった

「珍味もたんこのう」が中心で「珍味もたんこのう」が見出しになった

図 6. 1977 年事例のまとめ記事は食用利用が中心で「珍味もたんこのう」が見出しになった



# 流水の海岸で大捕物

## 閉じ込められたシマリス 北海道漁民らが仕とめる

「流水の海岸で大捕物」は、北海道の漁民たちが、シマリスを仕とめる様子を描いた記事である。記事は、シマリスの生態や、漁民たちの捕獲方法について詳しく説明している。また、シマリスの減少がもたらす影響についても触れている。

シマリスは、北海道の代表的な動物であり、その減少は生態系に大きな影響を与える。漁民たちは、シマリスを捕獲することで、その減少を食い止めることに努めている。記事は、シマリスの生態や、漁民たちの捕獲方法について詳しく説明している。また、シマリスの減少がもたらす影響についても触れている。

図 5. 1977 年の事例は全国版に掲載された「朝日新聞」1977 年(昭和 52 年) 2 月 6 日社会面



図7. 標津町忠類で発生したイシイルカ50数頭の漂着を伝える記事「北海道新聞」昭和31(1956)年3月6日

身骨格標本を作製するため、メス1頭分の骨格を引き取ったことだけであった(北海道新聞1977年2月)。1週間後に出たまとめの記事では、シャチの群れは雄2頭雌6頭で、うち1頭から2メートル近い胎児が出てきたと現場解体の様子を伝えるが、その中心は「珍味もたんのう」とブルドーザーを用いて生け捕り、食用にしたことであった(北海道新聞1977年2月12日、図6)。

**考察**

**座礁原因と発生場所**

今回報告した3事例は、すべて生きた状態で流水によって岸まで押されてきた座礁である。そして座礁には、少なくとも1925年の事例では潮の満ち引きが関係し、干潮時には完全に身動きが取れなくなった。場所は、1925年と1958年の2例は浅い磯浜で、遠浅の海に根や平らな磯が点在するような場所で最終的に座礁するようである。1977年は砂浜であったが、この時は流水が厚く逃げ出せなかったと想像される。

**人々の態度**

紹介した3事例ともに、座礁したシャチは生きているうらに捕獲され、食用とされている。住民の行動は氷に閉ざされる冬には得がたい新鮮な食肉の確保であり、まさに天恵への対応であった。捕獲の手段は、人力、馬力、重機と変化した。座礁シャチへの人々の態度は、近世以降の記録で見られる寄り鯨への対応と同様だったといえるだろう。

ところが、著者の1人、宇仁が学術コーディネイトを行なった2005年2月7日羅臼町相泊で発生した流氷によるシャチの座礁では、食肉利用は一切なされなかった。逆に枝幸の3事例で確認できる学術利用は、1977年の小樽水族館が全身骨格標本用に資料を確保したことのみである。1925年から1977年までの半世紀、北海道のオホーツク地方では座礁シャチに対する人々の認識は天賦の食料であり、1977年から2005年までの30年間で食料から学術資料へと大きく変化したといえる。なお、これはあくまで食味の悪いシャチに対する態度であって、食用に適したヒゲクジラであれば現在も定置網への混獲個体は積極的に利用されている。人々の態度の変化は、科学研究への共感よりも、食材に要求する食味レベルの高度化によるものかも知れない。

**おわりに**

「枝幸町史下巻」(枝幸町史編纂委員会編1971:109-110)には流氷による鯨類の座礁漂着2例の写真が掲載されている。具体的には、1)大正6年にも、流氷に追われた鯨が三〇頭余幌別川口に乗り上げという文章と「幌別川尻にあがった鯨の群」と記されたシャチの写真、2)「トイナイにあがった鯨の処理風景」と書かれているクジラの写真がある。写真は1)は体色や高い背ビレからシャチと判断できるが、2)はシャチではなくヒゲクジラのように見える。このうち1)の写真については、オホーツクミュージアムえさしにガラスネガが存在し「大正8年幌別川尻にあがった鯨の群 町史(下)P110」と町史とは少し異なる年代の付箋が貼り付けられている。ネガは、既存プリントを複写したもので、町史の編纂時の付箋ではなく、後から整理した際に町史の記述をもとに付されたメモのように見える。既存プリントは表面のみの撮影で、裏側の撮影はされておらず、書き込みは見当たらない。2)については町史に用いられた写真が見つからない。残念ながら、両者とも標本や撮影データが記された写真など検証可能な資料が見つからず、町史に紹介された大正6(1917)年のシャチの座

礁については現在のところ保留としておきたい。

ついでながら、1956（昭和31）年3月6日（4版7p）の「円卓」コーナーに、標津村忠類海岸にイルカ50数頭の漂着が見つかったことが写真付きで紹介されている（図7）。写真は横たわるイシイルカ5頭で遠景はうっすら雪が積もった砂浜や流氷に見える。記事でも、流氷にはさまれて圧死しただろうという古老の説が紹介されており、季節的にも流氷による集団座礁の可能性が高いと思われる。長い目で見ると流氷による鯨類の座礁は、しばしば発生している事象なのかも知れない。

枝幸での鯨類の座礁について、町史の事例を含め、今後、新たに標本や写真、詳しい記録などが出てこないとも限らない。何らかの情報があれば、お知らせくだされば幸いです。

## 謝辞

本論を作成するにあたり次の方や機関のお世話になりました。記してお礼申し上げます。枝幸町岡島の佐賀繁郎氏、佐賀幸夫氏、稚内市立図書館、網走市立図書館、小樽水族館、オホーツクミュージアムえさし、下関鯨類研究室。

## 参考文献

枝幸町史編纂委員会．1967．枝幸町史上巻．枝幸町  
枝幸町史編纂委員会．1971．枝幸町史下巻．枝幸町  
狩野和子．1994．鯨？．桂岡自然新聞，25．